



現代社会と考古学の切っても切れない関係

市川 彰 (考古学)

考古学は何百年、何千年、何万年前もの人間の生活や歴史を人間が残した「モノ」から解き明かそうとする学問と一般的には理解されています。「ロマンや夢があって、いいですね」とよく言われます。確かにロマンや夢はあります。とはいえ、まったく浮世離れした学問というわけではなく、考古学は現代社会と無縁ではありません。

例えば、私が専門とする中米各国では近代国家の形成過程で、古代遺跡それ自体、あるいは古代遺跡の考古学調査で発見された器物が、自国の文化的アイデンティティや象徴として意図的に取り込まれてきました。メキシコの国旗や通貨にはそれが如実に表現されています（是非、調べてみてください）。

また、中米のみならず世界中の古代遺跡には多くの観光客が集まります。遺跡保護という観点からは賛否はありますが、遺跡観光が各国の経済の一部を支えていることは間違いありません。

考古学と開発の関係も皆様に身近な問題でしょう。住宅や道路の建設で遺跡が発見されれば、工事を中断しなければならず、土地所有者や業者の方から考古学は煙たがられる場合もあります。とはいえ、こうした開発にともなう発掘調査により歴史を変える大発見がなされることもよくあります。世界文化遺産登録を目指している縄文遺跡群のひとつ、三内丸山遺跡（青森県）では野球場建設に先立つ調査で巨大な集落跡が見つかったことは有名です。遺跡保護か、開発優先か、この折り合いをどうするか、これもまた難しい現実的な問題なのです。



先スペイン時代・植民地時代・現代が織りなす不思議な空間
(メキシコの首都中心部・筆者撮影)

こうした現代社会と考古学の間を考えるパブリック考古学という分野が近年は盛んです。ロマンや夢をもちながら、しっかりと現実と向き合い、未来志向の考古学をしていきたいものです。

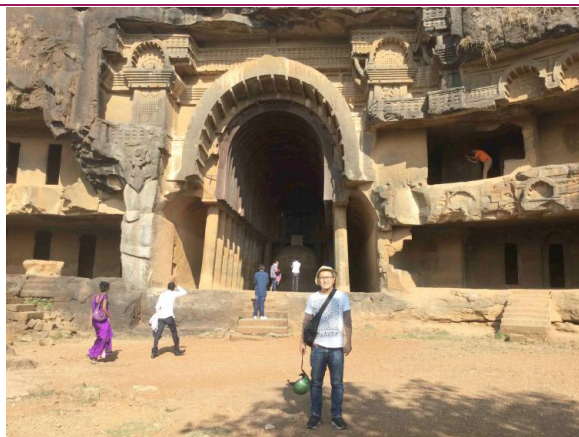
学生たちの研究生活—File36

インド・プネー大学への短期留学

研究室名：インド文化学研究室

2015年11月上旬から1ヶ月半ほど、インドのプネー市にあるプネー大学（正式名称：サヴィトリバーイー・プレー・プネー大学）に短期留学をしてきました。プネーはムンバイから200キロほど内陸に位置し、教育・研究の中心都市です。インド文化学研究室とプネー大学との歴史は深く、1973年から現在に至るまで多くの諸先輩が留学してきました。

プネー大学ではパーリ語学科助教授ア Nilvan 博士のもとで、インドのサンスクリット伝統文法学の研究に従事しました。一日3時間ほど個人レッスンを受け、毎日充実していました。また、名古屋から来たと伝えると他の先生も「お前の先輩を知っているぞ」と言い、親切にしてもらいました。親身に面倒を見て頂けるのは、諸先生、諸先輩のお陰だと感謝せずにはいられませんでした。



パーリ語・仏教学科の皆さんと修学旅行に一週間ほど同行できたのも素晴らしい体験でした。世界遺産サーンチへの27時間もの寝台列車の旅です。車内では物売りがひっきりなしに往復し「チャイ〜、チャイ〜」とチャイ売りが通ったと思えば、お弁当、お菓子、オモチャ、鍵、そして一見売れそうにないお土産なども販売しています。さらに、その間隙を縫って物乞いも乗車してきます。彼らはどこから乗ってくるのか不思議でした。思いがけない旅行でしたが、色々と刺激的な経験をしました。

インドへ行く前は不安もありましたが、行ってみると意外になんとかになりました。機会を作ってもう少し長期で留学したいと思っています。

(写真はブネー近くのバザー仏教石窟寺院にて撮影)

[矢崎 長潤 (博士後期課程2年)]

学生たちの研究生活—File37

「閲読中国」——中国古典の学びをとおして

研究室名：中国文学研究室

2014年8月、私は思い切って一年間の南京留学へと旅立った。

中国での生活は、最初は困難続きだった。食事、マナー、環境、人間関係…しかし、そうした困難を乗り越えつつ、旅行したり、現地の中国人や留学生らと知り合ったりして過ごした一年は、一種の忘れられない色彩を胸の中に残していった。

私たちの中国文学研究室では、皆さんが高校で学ぶようないわゆる漢詩や説話、また『三国志演義』『西遊記』といった小説など、幅広いテーマの作品を読むことができる。また、作品そのものだけでなく、同じく作品を読んだ昔の学者たちが書いた解説も合わせて読むことで、より正しい解釈を導いていく。しかし、このように作品を「閲読」するとき、文字を解釈するだけではなく、そこからさらに境界を一つ越えて、その後ろに流れるイメージも読み解くことができたとしたら…。たとえば、私は実際に中国を訪れたが、各所で見えてきた現代中国人の思想や人々の姿が、授業で読む中国古典作品の処々に、忽然と垣間見ることがある。それらのイメージは、意味や解釈に直接関わることはないけれど、自分をぐっと作品の世界に引き入れる。

そしてそのとき、中国古典の世界が、悠久の歴史を超えて、現代にも脈々と受け継がれていることを見るのだ。

三千年の歴史の中で磨きぬかれた中国古典を「閲読」ということは、文の意味を解釈することだけでは語り切れないほど深い。しかしそれは決して難しいことではなく、見方を変えて世界を一步広げれば、それが、中国古典を愛読したかつての中国や日本の姿、さらには日本の巨大な隣国、現代の中国をも「閲読」することにつながるのである。これこそが、私たちの研究の魅力だ。(写真は蘇州にて撮影)

[長谷川 浩平 (学部4年)]

最近の文学部

国境を超えて... (もちろん国内でもナンバーワンです)

本号は海外での調査や留学特集です。教員も学生も様々な国で専門的な研究をしているのが名大文学部の大きな魅力です。この夏休み中、国内外で貴重な経験をした学生さん、また長期留学に旅立った人もいます。(YK 記)

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで (『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)